

名所絵はがきを読む

旅行の大衆化、郵便制度の充実、写真と印刷技術の発達によって、観光地の写真絵はがきが流行した。それは、かつての観光地の風景や、観光を楽しむ人びとの姿、さらには当時の観光地をも写し出している。二つの温泉地―伊香保と草津―の名所絵はがきから、観光地の特色と風景の歴史を読み解く。

関戸 明子
Shizuko Akiko

旅先で絵はがきを買い家族などに送る、または旅行の記念に絵はがきを蒐集するという行為は、交通機関の整備による旅行の大衆化、郵便制度の充実、写真と印刷技術の発達といった要素によって成立した。一方で、カメラの普及により個人で写真を撮るようになるにつれ、その需要は減退していった。ここでは、絵はがきが流行した時期の近代日本の名所絵はがきを素材に、観光地―伊香保と草津の二つの温泉地―の特色を読み解いてみたい。なお、近代における温泉地の動向については、拙著『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版、二〇〇七年）を参照いただきたい。

絵はがき小史

日本において絵はがきが一般的に作られ、使われるようになるのは、一九〇〇（明治三三年）に私製はがきの発行・使用が許可されたからのことである。絵はがきの需要は、一九〇四（明

治三七）年の日露戦争の勃発で、日本と大陸を結ぶ通信手段として、記念絵はがきが発行されたことで爆発的に増大した。その結果、絵はがきブームが到来する。これ以降、絵はがきの消費量と種類が劇的に増え、製造・販売が盛んになっていった（生田誠『2005日本絵葉書カタログ』里文出版、二〇〇四年、

生田誠『麗しき日本絵葉書』日本郵趣出版、二〇〇九年、細馬宏通『絵はがきの時代』青土社、二〇〇六年）。絵はがきには、記念絵はがき、美人絵はがき、事件絵はがき、デザイン絵はがきなど多くの種類があるが、なかでも風景写真を印刷した名所絵はがきは、絵はがきのなかで主要な位置を占める。

図1 草津白根山登山の絵はがき



山登根白 (泉温津草州上)



山登高 泉温津草州上

絵はがきには、図書・雑誌のような書誌情報がなく、発行された年代を特定しがたいという問題がある。郵便として使われた絵はがきで消印が読み取れるものであれば、使用時期が特定できる。そうでない場合、発行時期を特定する簡便な手がかりとして、①宛名面の三分の一が通信文に使用可能となった一九〇七（明治四〇）年、②宛名面の二分の一が通信文に使用可能となった一九一八（大正七）年、③宛名面上部に記載の「郵便はがき」が「郵便はがき」となった一九三三（昭和八）年という三つの画期があげられる。そして④第二次大戦後には「郵便はがき」の記載が左横書きになる。

ただし、この手がかりは、発行時期を見分けるもので、撮影時期を示すものではない。図1の二枚の絵はがきは、いずれも草津白根山への

③がある。また一九二九(昭和四)年に温泉街と榛名山駅を結んで開通した「ケーブルカー入口」の看板がみえるので、昭和初期の撮影であることがわかる。

図5も②の形式で、左手に「旅館木村利平」、右手に「温泉宿丸本屋亀太郎」(図2②)がみえ、三枚の絵はがきのうちでは、もつとも上段を撮影している。虫取り網をもった少年の下にみえるのは、小間口である。伊香保の源泉は石段街の奥にあり、そこから大堰を通って、さらに決められた大きさの小間口に引湯され、各旅館に引き込まれている。写真にあるのは、温泉が分湯される場所であり、現在でも小間口観覧所として見学することができる。

温泉街を写した絵はがきは、浴医局や温泉取締所付近から見上げたものが多い。これが伊香保独特の雰囲気を与えるアングルとして人気があったためであろう。田山花袋「伊香保案内」



図2 伊香保温泉の石段街
山内只七「上州伊香保温泉場全景」部分、
1915(大正4)年頃

1がある。石段が石段に重なって続いて行つてゐる。伊香保名物を売る店だの、八百屋だの、旅館だの、料理店だのがゴタゴタと重なり合つて見えてゐる。……旅館は数十軒両側に並んでゐる、その大きなものは大抵三階四階で、数百人の客は優にこれを収容することが出来る」と描かれている。

明治期から大正期の複数の鳥瞰図を比較検討すると、石段沿いに小規模旅館と店舗が建ち並び、その奥に大規模旅館が位置するという基本的な空間構成が見いだされる。そのような構成は、図6の温泉街を俯瞰した絵はがきで、屋根の大きさと配置によって確認できる。ただし、上から見下ろした写真では、石段街特有の景観をアピールすることはできていない。

草津温泉の絵はがき

草津温泉は白根山東麓の標高一一五〇から

登山風景を撮ったものである。二頭の馬には櫓が掛けられ、女性二人と女兒二人が乗っている。これは、草津温泉のガイドブックには「櫓馬」として案内されている。そして、もう一頭には男性がまたがり、馬子は三人で、二枚の写真は同一の白根登山に向かう一行を、違う場所で撮影したものであることがわかる。しかし、彩色の絵はがきは①、白黒の絵はがきは②の形式で、発行時期が異なる。この二枚の写真は、別のセットの絵はがきでも活用されており、白根登山を象徴する風景として、繰り返し用いられた画像と考えられる。撮影時期については、関連する記録と画像から判断していかねばならない。

伊香保温泉の絵はがき

伊香保温泉は榛名山の標高七二〇から八〇〇メートルの山腹斜面に位置する。温泉街の中心は石段街であり、約三六〇段の石段の両側に旅館や土産物店・飲食店が建ち並び、その最上部には伊香保神社が鎮座する。

大正期の鳥瞰図で温泉街の主要部を概観しておきたい(図2)。この図には刊年を欠くが、制

作者が共通で、同一の構図のものに一九一五(大正四)年印刷発行とあるので、温泉街の多くを焼失した一九二〇(大正九)年の大火以前の伊香保を描いたものといえる。

伊香保の本百姓は、近世には一四軒の大屋に固定され、大屋たちは、屋敷地・耕地・温泉権を世襲して独占した。図2の記号では、⑥の蓬菜館・木暮金太夫、⑦の浴蘭楼・岸権三郎、⑧の子の木暮・木暮武太夫、⑨の仁泉亭・千明三右衛門の四軒が当時も残っていた旧大屋であった。大手の旅館は石段街より左右に奥まった広い敷地に温泉宿が建てられているので、石段街の下部から見上げて大きな宿は確認しづらい。

図3は①の形式の絵はがきである。図の左手の建物の二階に「温泉宿亀屋」(図2⑤)とあり、一階には「いかほ名産栗ようかん」の看板が掛かっている。その奥に立てかけられている棚に並んでいるのは絵はがきであろうか。亀屋の向かいの右手の建物は浴医局であり、その奥にある「八百屋」(図2⑦)前には人びとが立ち並んでいる。

図4は②の形式の絵はがきで、右手の建物が「八百屋」、左手が「みやげ鴻野屋」と「吉岡酒店」で、さらに奥に「木村利平客室」(図2



図4 「(伊香保名所)賑やかな温泉街」



図5 「上州 伊香保温泉場」



図6 「伊香保温泉全景」



図3 「伊香保温泉の全景」

「草津温泉時間湯(其一)」「草津温泉時間湯(其二)」「草津温泉時間湯(其三)」「白根神社」「西ノ河原」「翁仙ノ滝」「殺生河原ノ獅子岩」「運動茶屋ヨリ浅間山ヲ望ム」の九枚が収められている。このほか、湯畑の記念塔や白根山噴火口といった写真がセットに入る場合もあるが、温泉街の風景、湯治の様子、周辺の景勝地という基本的な組み合わせほどのセットでも保たれている。名所絵はがきでは、その観光地を象徴するものとして、どのシーンが選ばれているのかを検討することも重要な課題である。

図10には上述のセットの一枚を示した。これを見ると、浅間山とその噴煙は加筆されていることが明らかである。浅間山の絵はがきには、図11のように、噴煙を上げた瞬間を記録したのもある。浅間山や白根山といった火山が観光の対象となったのは、近代的な新しい風景観によるところが大きい。しかし、この時には浅間



図7 草津温泉の湯畑周辺
松井天山「上州草津温泉鳥瞰図」部分、
1938(昭和13)年

山と噴煙を撮影することができず、このような関心に依るために、作爲的に描写を加えたのであろう。絵はがきを眺めることで、いろいろな発見があり、地理的想像力が喚起される。

絵はがきに関する研究は、一九〇五年から一〇年代初頭にかけて、一九三〇年代、一九八〇年代前後以降の三つのまとまりが観察できるが、全体としてみると基礎研究の部分がもろく、データ化の蓄積不足が大きな障害になっていると指摘されている(佐藤健二「風景の生産・風景の解放」講談社、一九九四年)。近年、絵はがきに関するさまざまな著書が出版されているが、絵はがきのデータ化を進めるための記録システムは整備はいまだ十分とはいえない。さらなる研究の進化には、こうした基礎作りも必要である。

(群馬大学教育学部・歴史地理学)

図11 「大正九年十二月二十六日午前十時三十九分
浅間山大噴火」



大正九年十二月二十六日午前十時三十九分
浅間山大噴火(影写士梅森大)見り。近附茶屋ノ麓山間浅

図10 「(草津温泉)運動茶屋ヨリ浅間山ヲ望ム」



▲望ノ山間浅ノ茶屋動運 (泉温津草)

一二〇〇メートルの高原に温泉街が広がり、その中心に自噴泉としては日本一の湧出量を誇る湯畑が位置する。湯畑では、木製の樋に掛け流しを行い、源泉から湧く高温の温泉を冷却し、湯の花を採取している。

一九三八(昭和一三)年の鳥瞰図をみると、湯畑に接して滝ノ湯(図7A)・松ノ湯(図7B)、その周囲には熱ノ湯・白旗ノ湯(図7C)・千代の湯・鷲ノ湯・地蔵ノ湯の共同浴場があることがわかる。滝ノ湯を除く六箇所の浴場では、草津独特の入浴法である時間湯が行われていた。

近世以来、草津を描いた絵図の定番の構図は、湯畑を中心として滝ノ湯を手前に、光泉寺(図7E)を背後に置き、右手奥に白根山、左手奥に浅間山を配置するというものであった。絵はがきにおいて温泉街を写し取る構図は、北東から温泉街を俯瞰する眺めと、南西から湯畑をクローズアップするものが多数を占める。写真では鳥瞰図のような架空の高い視点は得られないため、「見はらし」(図7X)付近の高台から撮影されたものが非常に多い。

ここでは二枚の絵はがきを比べてみよう。両者とも②の形式で、電柱が写っており、草津に電気が引かれた一九一九(大正八)年以降の撮影といえる。中央に配置された湯畑に注目すると、図8では一四本、図9では一本の木

絵はがきの利用に向けて

樋が確認でき、変化がみられる。Aの滝ノ湯の浴場の建物も改築されている。一九三六(昭和一一)年の案内書によれば、草津の共同浴場のうち、滝ノ湯だけが一人二銭と有料で、源泉に若干の水を混ぜて温度を下げ、湯治が主眼でなく観光遊覧に来た客を迎えていた。建築も新しく有料制度も新しい試みだけに、ここに限って銭湯のように番台があり、一泊の観光客や土地の有産階級に利用され、他の浴場のような混雑と不潔がないとある(中村舜二「天下の草津温泉」大東京社、一九三六年)。図9は、この新しい滝ノ湯を撮影したものである。

このほかに変化が認められる部分には、湯畑に接する建物の撤去(D)、徳川吉宗が草津の湯を江戸に運ばせ入浴したことを伝える記念塔の設置(E)、正面を平らにした看板建築の名古屋館(F)をはじめとする左手の建物の更新、富久住(G)・キリ山(H)・ナラヤ(I)といった旅館の改築、などがあげられる。このように、時期の異なる絵はがきを検討していくと、文書には詳細が記録されない具体的な景観の変遷をたどることができる。研究資料として写真のもつ魅力である。

絵はがきには、袋入りのセットで販売されているものも多い。例えば、「草津温泉名勝御絵はがき」には、「草津温泉全景」

図9 「草津温泉場の全景」

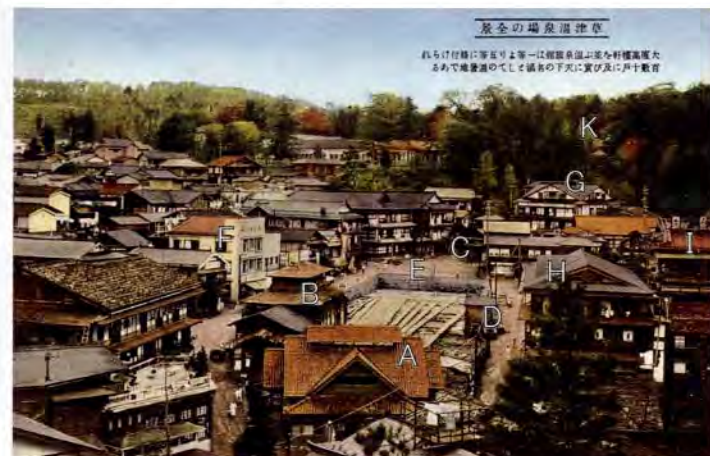


図8 「草津町全景」

